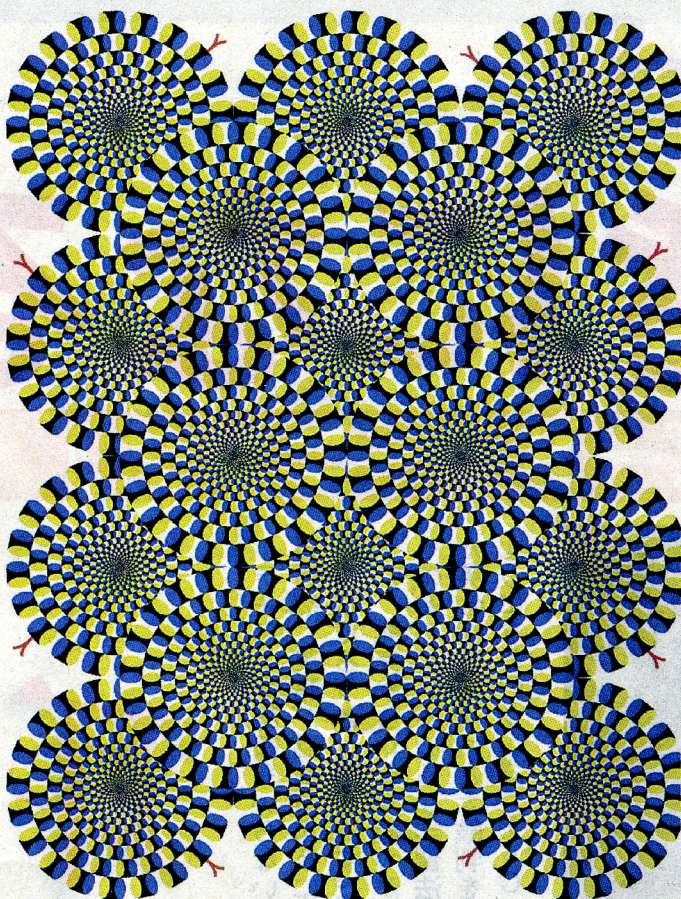


目の冒険

錯視の話③

北岡 明佳



おそれていたことが起

きてしまった。前回紹介した「どんぐりりん」に

対し、「どんぐりの輪が回転しない」という問い

合わせを山のように頂いたのだ。

あの作品は視野の中心

からはずれたところで起こる錯視

を使う

おり、一

つの輪に注目すると、そ

の輪は止まっているが、視界の隅の輪が回り始める。図が小さいと、明る

いところで紙面にぐつと目を近づけないとダメなのであった。

それでもこの錯視が起きない人はいるのだが、

知能、性格、健康、記憶

力などには全く関係がないので安心して頂きたい。

私たちの研究グループでは、この錯視はある種の不随意眼球運動と関係していると考えている。

周辺ドリフト錯視とい

い、何もなくても動いて見える錯視として最近注目を集めつつある。

この錯視がなぜ起るかに

ついては、世界中の研究者が知恵を絞っている段階である。ただし、

デザイン上の法則は明らか

かとなっており、図でいえば、黒→青↓白→黄↓

黒の方向に少しずつ回転

して見える。

図は筆者の作品で、「蛇の回転」という。これは周辺ドリフト錯視として最も錯視量の多い

図形なので、紙面でも錯

視が見えることを期待したい。

それでも紙面の図では

小さすぎて見えないという

「何もなくても回る」蛇

人は、筆者のウェブサイ

ト (<http://www.tsunemi.ac.jp/~akitaoka/>) を訪れて頂

きたい。8月には筆者の錯視デザインの本「トリ

ック・アイズ グラフィックス」(カンゼン刊)

も発売される。

(立命館大助教授)